遺伝子バンク30年 14

三島・国立遺伝研

ユーザーによる登録へ

1990年7月、日本DNAデータバンク（DDBJ）の運営は国立遺伝学研究所（遺伝研）の教授に昇任した五條堀孝に引き継がれた。減額された予算の復活を求めて、五條堀は所長の富沢純一とともに文部省に何度も足を運んだという。

一方でヒトゲノム解析センター（HGC）は紆余曲折を経て東京大に設置され、91年7月に最初の研究室が発足した。この研究室の教授は、京都大化学研究所（化研）の金久實が兼任することになった。

このころには日米欧の三つのデータバンクの実務者連携が本格化してくる。普段からの電子メールでのやりとりに加え、毎年順番に各バンクの所在地に集まり、密に話し合うようになった。

88年からは国際諮問委員会も毎年開かれ、日米欧から推薦された委員が利用者の立場からバンク運営への助言を行った。日本は、金久とDDBJ初代運営委員長の内田久雄が91年まで委員を務めた。

92年に委員になった磯野克己によると、同委員会の働きかけによってデータ収集のあり方が大きく変わった。当初はバンク側で学術誌からDNAデータを抽出し、手で入力していた。しかし有力な生物学者などが各誌に呼びかけた結果、論文投稿時にDNAデータをバンクに登録するよう多くの雑誌が義務づけるようになった。つまり、データ生産者が自らデータを登録する仕組みが整ったのだ。

90年代半ばからDDBJでもHGCでも研究室が増設され、大型計算機が導入された。化研ではデータベース「KEGG」の構築も始まった。インターネットとDNA読み取り装置の普及が急速に進んだ時期だった。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）

1996年4月に遺伝研で開かれた国際諮問委員会（五條堀孝遺伝研名誉教授提供）